

左京七条一坊の調査

—第372次

はじめに

介護老人保健施設建設にともなう事前調査である。調査地は、平城京左京七条一坊十六坪の西半中央にあたる。十六坪は、北を六条大路、南を七条条間北小路、東を東一坊大路、西を東一坊坊間東小路に囲まれた区画である。1994年におこなった第251～255次調査では、十六坪のほぼ四分の三を調査し、奈良時代から平安時代にいたる（Ⅰ～Ⅵ期に区分）建物の配置、土地利用のありかたなどが明らかにされている（『平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告』奈文研学報第56冊、1997年）。

調査区は、前述の各調査地に三方を囲まれた場所に位置する（図175）。東西50m、南北13mの東西に長い区画（東西区）と、東西6m、南北9mの南北に長い区画（南北区）がT字形になるように設定した（704㎡）が、現地表面から旧耕土面までの客土が2m以上と厚く、安全のための法面部分を広く取ったために、実質的な調査面積は、約383㎡となった。調査期間は、2004年6月7日～7月23日である。

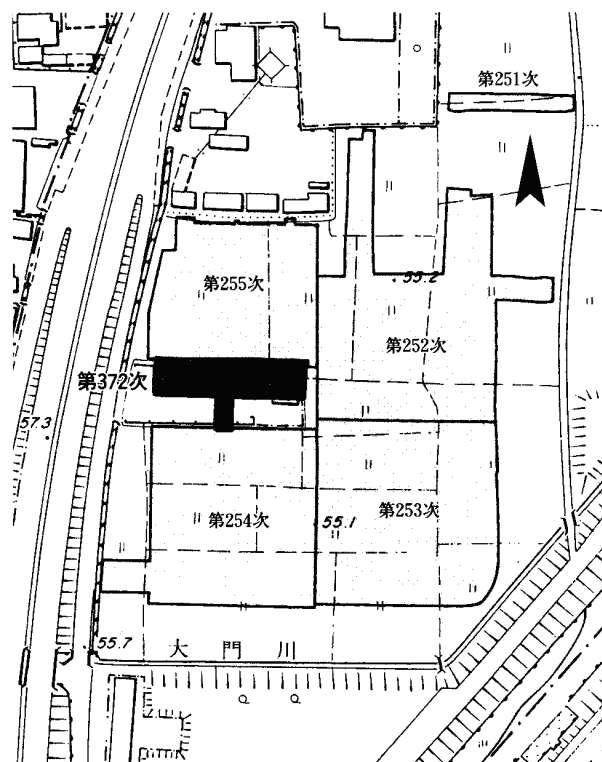


図175 第372次調査位置図

検出遺構

調査地の基本層序は、客土の下、灰褐色砂質土、黄褐色粘質土、暗褐色砂質土、橙褐色砂質土となる。遺物包含層および耕作溝埋土である灰褐色砂質土を掘削したのち、黄褐色粘質土層上面において遺構検出をおこなった。

検出した主な遺構は、調査区北辺で東西45m分を検出した素掘溝1条、掘立柱建物1棟、塀4条、土坑3基などである。遺構内からの遺物、および遺構間の重複に乏しく、時期、遺構変遷に言及できる遺構は少ない。

東西溝SD8875 東西調査区の北辺にそって、調査区東壁から西壁まで45m分を検出した素掘りの東西溝。東西の調査区外へ続く。溝の南岸はほぼ直線的に東西に通じ、暗褐色砂質土に対する掘り込みも明瞭であるのに対し、北岸は全体に不明瞭である。また、調査区中央付近、溝上に掘り込まれた土坑SK8876を境に、東西で様相が異なる。西半は、溝幅が1.7～2.2mと広く、深さ20cm。溝底には周溝状に幅30cmの溝がめぐり、陸橋状になる箇所もある。埋土は、暗青灰褐色の粘質土。

東半では、溝に対して不整形な土坑が連続的に掘り込まれる。西からSK8876、SK8877、SK8878、SK8879、SK8880の5基である。

SK8876は、東西3.9m、南北2.1m、深さ50cmの無花果形の土坑（図176-C）。底面で杭穴状の小ピットを多数検出した。SK8877は、東西5m、南北1.2m、深さ35cmの長楕円形の土坑（図176-B）。SK8878は、東西2m、南北1.5m、深さ45cmの楕円形の土坑。SK8879は、東西3.2m、南北1.5m、深さ45cmの楕円形の土坑。SK8880は、東西3m以上、南北2m、深さ37cmの長楕円形の土坑で、東端は調査区外へ続く。埋土はいずれも灰褐色あるいは橙褐色の粘質土を主体とする。土坑と重複していない部分では、SD8875の溝幅は80cm、深さ15cmになる。

これら一連の遺構の上層に重なる方形遺構SX8890の出土土器が、奈良時代前半であることから、SD8875、およびSK8876～SK8880も奈良時代前半期の遺構と考えられる。

掘立柱東西棟建物SB8881 南北調査区北半で、東壁に3基、西壁に2基の柱穴を検出した。柱穴はいずれも黄褐色粘質土上面から掘り込まれており、掘形は1辺80cmの方形。梁行2間の東西棟と考えられる。西北の柱穴には長さ64cm、径16cmの柱根が遺存していたが、他はすべて

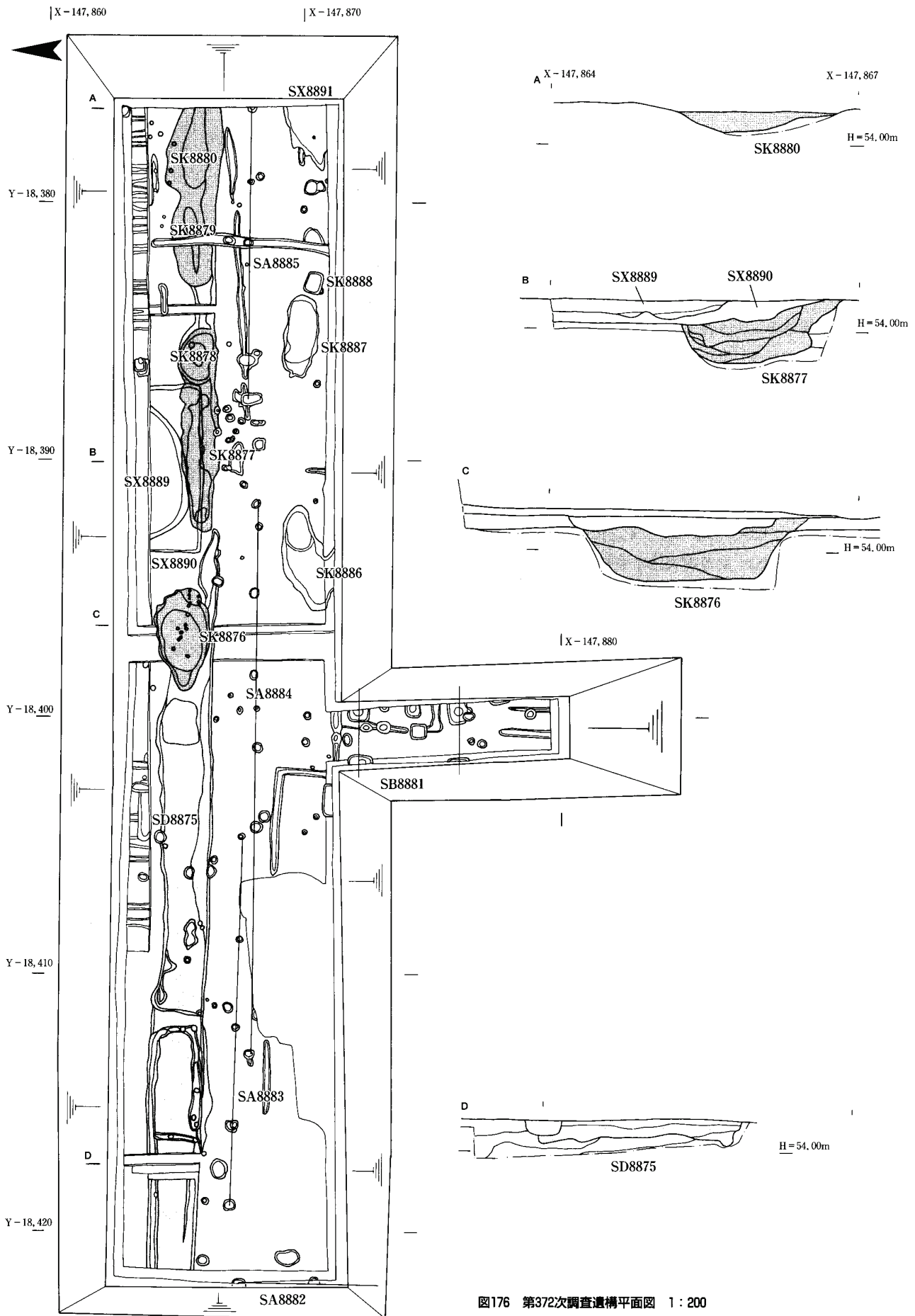


図176 第372次調査遺構平面図 1:200
SD8875関連断面図 1:50

抜き取られている。東壁中央の柱穴はやや南に寄ることから、妻中央の柱ではなく、間仕切りなどに関わるものであろう。梁行13尺(南北3.8m)、桁行柱間7尺(2.06m)。北側柱筋は、SD8875の南岸から5.8m南に位置する。

掘立柱南北塀SA8882 調査区西壁南半で、柱穴2基を検出した。黄褐色粘質土上面より掘り込まれており、深さ60cm。柱間は約3m。第254次調査で検出したSA6598の延長上北端にあたる可能性がある。

掘立柱東西塀SA8883 東西調査区西半で、全長14.2m、4間分検出した。西で北に振れ、SD8875の南岸から約1m南に位置する。柱穴は黄褐色粘質土から掘り込まれている。柱間寸法は、西から3.1、3.8、3.4、3.9mとややばらつきがある。SA8885と筋の揃う可能性がある。

掘立柱東西塀SA8884 東西調査区中央で、全長21.3m検出した。5間以上となる。SD8875の南岸から約1.8m南に位置する。柱穴は黄褐色粘質土から掘り込まれている。柱間寸法は、西から2穴目から3.1、2.8、3.1、3.4mとほぼ等間隔である。

掘立柱東西塀SA8885 東西調査区東半で、全長11.3m、4間分を検出した。SD8875の南岸から約1.3m南に位置する。柱穴は黄褐色粘質土から掘り込まれている。柱間寸法は、西から1.5、4.5、2.4、2.8mとなり不揃いである。西端の柱穴2基は、柱間が狭いことから、何らかの施設が取り付けいていた可能性がある。

土坑SK8886 東西調査区東半南辺で検出した3基の土坑のうち、最も西に位置する。東西4m、南北1.5mの不整形な平面を呈し南端は調査区外へ続く。深さ20cmの全体に浅いたまり状の土坑である。埋土は炭化物を含む黄灰褐色土。平城Ⅲ期頃の土器が出土した。

土坑SK8887 東西3.1m、南北1.3mの長楕円形の土坑で、深さ20cm。埋土は炭化物を含む橙灰褐色土で、平城Ⅲ期の土器が出土した。

土坑SK8888 東西80cm、南北65cm、深さ35cmの長方形の土坑。埋土は炭化物を含む橙褐色土。奈良時代前半の土器が出土した。

落ち込みSX8889 東西調査区東半北辺で検出した東西5.2m、南北1.5mの半円形平面を呈する窪み状の遺構。北半は調査区外へ続く。深さ20cm。SX8890を掘り込む。埋土は灰黄褐色の粘質土で、奈良時代後半から末にかけての土器が出土した。

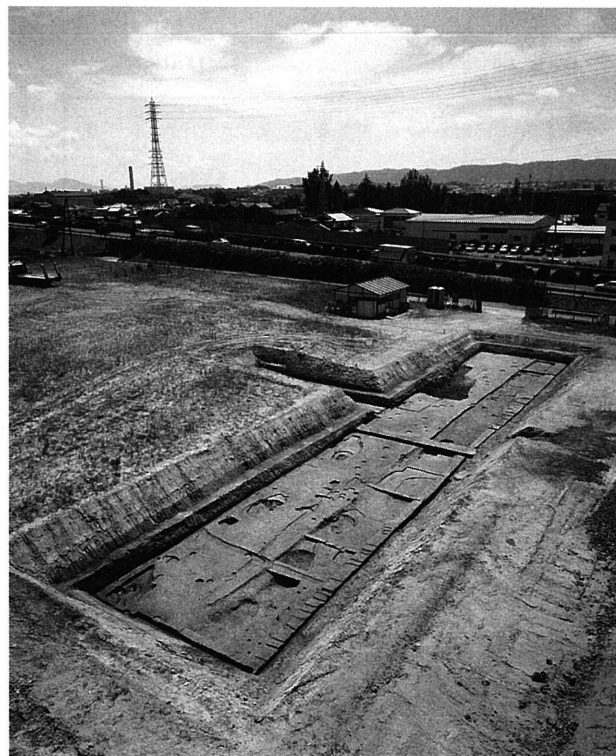


図177 調査区全景(北東から)

方形遺構SX8890 東西6.4m、南北2m以上の方形平面を呈する遺構。北半は調査区外へ続く。南辺は東西溝SD8875埋土に重複する。深さ15cm。埋土は、橙褐色砂質土。奈良時代前半の土器が出土した。

落ち込みSX8891 東西調査区東南隅で検出した落ち込み状の遺構。東西2.5m、南北1.5m。埋土は粗粒砂を主体とし、粘質土と互層をなすことから、自然流路の一部である可能性がある。掘形等が確認されなかったため遺構との関係は不明であるが、長さ47cm、径16cmの柱根が据えられた状態で出土した。(次山 淳)

出土遺物

土器・土製品 出土量は土師器、須恵器を中心に整理用コンテナ12箱分であり、調査面積に比して少量であるとともに、土師器の遺存状態は特に不良である。年代的には、包含層や耕作溝から中世の土器片が極めて少量出土しているが、その他の遺物は基本的に奈良時代のものである。ここでは落ち込みSX8889(図178-1~6)と、その下層にあたるSX8890(7~9)出土の須恵器を中心に図示した。SX8889出土土器は、奈良時代後半のもので、土師器に、杯A、高杯、甕、須恵器に、杯A、杯B(1・2)、同蓋(3)、壺(4~6)があり、壺(5)の底部には静止糸切りの痕跡が認められる。SX8890出土土器は、奈良時代前半のもので、土師器に、杯の小片、甕、須恵器に、杯B(7、8)・壺A、壺D(9)、甕がある。このほかに、須恵器に記された墨書土器2点、奈良三彩と思える小片1点、陶硯2点、土馬1点がある。陶硯は、蹄脚円面硯と円形硯(10)の小片で、いずれも灰褐色砂質土層出土である。

(川越俊一)

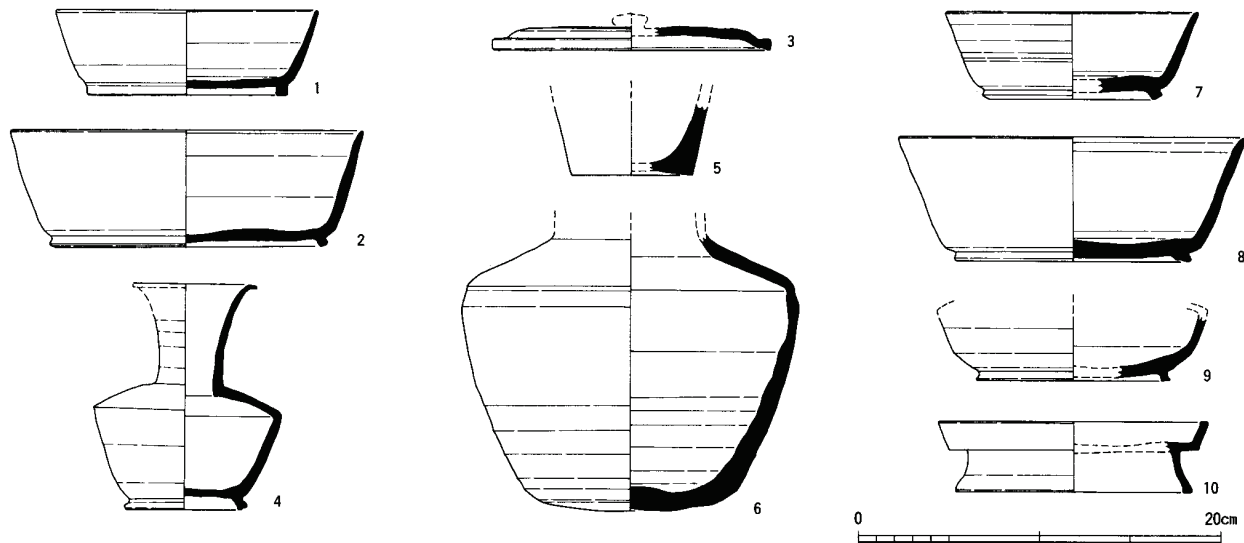


図178 第372次調査出土土器 1:4 (1~6: SX8889, 7~9: SX8890, 10: 灰褐色砂質土)

その他の遺物 瓦・磚類の出土はわずかで、軒瓦の出土はない。丸瓦47点、平瓦239点、磚7点、全体で22.54kgをはかる。銭貨は、景德元寶が1点出土。北宋銭で、1004年初鑄。この他に、サヌカイト製の剥片、鉄製品などが出土した。

まとめ

今回の調査地は、近代以降の攪乱も多く、全体に遺構密度も希薄であったが、検出した遺構のありかたは、さきに調査された坪東半部と類似し、対称をなすと考えられる遺構も複数検出した。

① 東西溝SD8875は、東側の第252次調査で検出したSD6430と一連の溝である可能性が高い(ここでは、直接的な関係が不明のため、別の遺構番号を付した)。SD6430は、六条大路南側溝南岸から60m南で検出した素掘東西溝で、幅1m、深さ20cm。34.7m分を確認し、西端は未発掘部分(今回の調査地)へ続くものとされた。I期(和銅年間の平城京造営期)に比定されている。十六坪全体を南北に区画する区画溝、あるいは六条大路心と、七条条間北小路心の心々距離を二分した坪内の地割り溝という性格が想定されている。

前述のように、SD8875東半部における本来の溝幅と深さ(幅80cm、深さ15cm)はSD6430にちかく、奈良時代前半という時期も矛盾しない。暗褐色砂質土に対する掘り込みの明確な南岸のラインが、位置関係からもSD6430を踏襲していると考えられる。したがって、坪西半部においても、同様の区画溝が存在していたことになり、確認されたその総延長は約80mとなる。

② 掘立柱東西棟建物SB8881は、坪西南部のほぼ中央北辺に位置するが、東南部では同位置にSB6425およびSB6426が建てられている。SB6425は、II期(恭仁京遷都まで)の正殿と考えられている建物で、前述のSD6430から

南に6mに位置する。桁行5間×梁行2間の身舎に南廂のつく東西棟建物で、桁行中央3間8尺、両端間8.5尺、梁行8尺、廂の出10.5尺となる。北側柱筋を坪の南北二等分線に揃える。

SB6426は、III期(平城遷都後から神護景雲年間まで)に同位置で廂を廃して建て替えられた建物で、桁行の両端間のみ9尺となる。III期には、13m南に正殿SB6500が建てられ、SB6426はその後殿と考えられている。

SB8881も、建物全体の規模・構造については不明な点が多いが、坪内での位置、SD8875との距離などから、坪南西部において、SB6425・6426と対称位置に建てられた建物である可能性が高い。しかしながら、柱間が東の2棟に比べてやや小さいこと、廂をもたないこと等の点に相異が認められる。

③ 掘立柱南北塀SA8882は、第254次調査で検出したSA6598の延長上にあたる可能性がある。SA6598は、全長41m、16間分検出した南北塀で、北で東へ3°30′振れる。その時期はV期(平安時代前期)に比定されている。北側の第255次調査区に続かないことから、坪内二等分線付近でとまる可能性が指摘されている。SA8882をSA6598の延長とした場合、坪の南北二等分線を越えて北へ延びることから、むしろSD8875の位置と塀の北限との関係が示唆される。

また、今回の調査では坪南西部の北辺を区画する東西塀3条(SA8883・SA8884・SA8885)を検出した。これらの塀も、SD8875から一定の間隔で並行して設けられている。このことから、遺構の時期、SD8875の溝としての継続期間などに問題が残るが、坪内の南北の区分においては、先の調査で指摘された六条大路心と七条条間北小路心の心々距離を二分した線が、何らかのかたちで継続して意識されていた可能性を考えておきたい。(次山 淳)